

演題番号：C2

非分泌型多発性骨髄腫の犬の1例

○土屋 徹¹⁾，大治和久²⁾，山下今日子¹⁾，小澤響世^{1) 3)}，岡本芽衣¹⁾，竹内由佳¹⁾，大森伊織¹⁾，真下忠久¹⁾

¹⁾ 舞鶴動物医療センター，²⁾ オオジ動物病院，³⁾ ソムナス動物麻酔サービス

1. はじめに：犬では多発性骨髄腫（以下MM）は造血器腫瘍の約8%、そして骨の原発性あるいは続発性腫瘍の3.6%を占める。ヒトではMMの1.5%に非分泌型を認め、犬にも非分泌型MMの報告が数例あるが、その頻度は不明である。今回病的骨折及び骨融解性病変がみられた非分泌型MMの犬に遭遇したため、その診断及び治療法を検討した。

2. 症 例：対象：7歳4カ月齢、避妊雌の英国・G・レトリバー 主訴：散歩後からの右後肢挙上（散歩中に特定のイベント無し）

3. 結 果：第1病日、X線検査にて右下腿骨遠位骨折を認めた。第5病日、血液検査に著変を認めず、DCPを用いたダブルプレート法による骨折整復を実施した。第9病日、プレートの破綻により、創外固定法にて再度骨折整復を実施したが、第84病日、創外固定のピンに緩みを認めたため、髄内ピンを用いて3度目の骨折整復を計画した。この際、X線にて下腿骨に骨融解像を認めたため、一時的固定と病理組織学的検査も実施した。その結果、腫瘍性疾患が完全には否定できず、また顕著な骨増生所見から、第107病日に右大腿部からの断脚を実施した。また、第118病日に右肩甲部に5mm大

の皮下腫瘍を認め、第128病日には皮下腫瘍が全身に多発してきたため、CT検査及び皮下腫瘍の生検を実施。左第11肋骨遠位の骨融解像所見、断脚した脛骨及び皮下腫瘍の病理組織学的検査の結果より非分泌型MMと診断し、メルファラン7mg/m²のパルス療法およびプレドニゾン1.17mg/kg SIDにより治療を開始した。第315日現在、触知可能な皮下腫瘍は3個ほどと減少し、一般状態も良好である。

4. 考察及び結語：ヒトの非分泌型MMでは血清や尿中にM蛋白がなく、尿中ベンズジョーンズ蛋白が検出されず、特徴的な血液検査や尿検査所見を呈さない。また、国際骨髄腫ワーキンググループによりヒトの非分泌型MMの診断基準が出されている。本症例も血液検査や尿検査に著変を認めず、上記の非分泌型MMの診断基準を満たし、治療後から皮下腫瘍減少も認めるため非分泌型MMの診断に矛盾はないと思われる。ただし、本症例では第1病日から治療開始まで約4カ月経過していた。骨折診断時の画像検査や血液検査に著変が無い場合に、特定のイベント無く骨折した症例では、本疾患を考慮し早期の生検や全身の骨評価のための画像検査を行う必要があると思われる。